

・北海道の郷土料理をありがとうございました。薄味で塩分を取り過ぎないように調理してあるんですね。ゼリーがとっても美味しかったです。

(松田澄子さん)

・衛生面ではとても気を使っていたいただいて、これなら安心だと思えました。メニューも私達の子どもの頃と比べてよく考えられていると思えました。

(三宅寿美さん)

・カロリーや栄養面では問題がないと思えました。主食のごはんやパンにもおかずとして、焼きそばやスパゲティーがつくのはどんなものでしょうか。

(無記名の方)

・少額の費用で栄養のバランスや好みまで考え合わせられていて、皆様の努力に感謝するとともに、今後も楽しい学校給食をお願い致します。

(斉藤順子さん)

・試食会に出席できて喜んでいきます。とても美味しかったです。給食当番の清潔面に徹底した指導がされていることにびっくりしました。

(本多泉さん)



お母さんによる会食風景

## 五、寄稿

## 一、よもぎ寿司

上地四丁目 岩瀬貴代子

我が家では、朝六時二十分に中学一年の息子と小学四年の娘を起こします。

「健ちゃん、奈っちゃん、おはようー起きる時間だよ。」  
と、声をかけます。六時三十分の「いただきます。」に間に合うように。

二人の子供は大急ぎで洋服に着替えます。洗面場に行き、顔だけ洗います。そして、六時三十分には、家族五人の朝食が始まります。大工の祖父が一番先に箸をつけます。昨日のテレビ番組のこと、学校のこと、友だちのこと。いろいろ、ペチャクチャおしゃべりが続きます。下の娘は御飯が冷めても、まだ食べています。息子は太あくび。こうした、あわただしい朝食の一時です。

朝食が終ると、一番に息子がおじいさんに話しかけます。

「おじいちゃん、お便所お先に。」

「おっ。」

次に、娘が同じように続けます。

「おじいちゃん、お先に。」

「出たよ。」

トイレくらいは黙って行けばいいのと思いますが、これが日課でもあります。

食器の片付けも終り、次は洗濯物を干す仕事です。洗濯籠が二つの時は、娘と私が一つずつ持って外に出ます。娘も真剣に

手伝ってくれますが、その次は、娘が楽しみに待っているバトミントンの始まりです。

朝のすがすがしい、ほんの少しの時間ですが、通学班の子たちも加わって一緒に楽しみます。

「〇〇ちゃん、おはよう。」

「おはようございます。」

どの子も学校に行くのを嫌がらず、バトミントンを楽しみにしていています。

「行ってらっしゃい、気をつけてね。」

「また、明日ね。」

なんとなく、私も心がはずんできます。

ちようど昼頃になって、半日の授業を終えた娘が学校から帰ってきました。

「ただいま！」

隣の家まで聞こえそうな大きな声です。

そのうちに、電話が鳴りました。娘が走って行って受話器を取ります。友だちと一緒に遊ぶ約束ができています。

春の暖かな気候に誘われて、早速、田んぼに出かけて行きました。しばらくしてレンゲの花をいっぱい摘んで帰ってきました。



6年 落合 直子

庭にビニールの敷物を敷き、ままごと遊びが始まりました。トントン、カチカチ。レンゲをつぶして、ピンクの汁をしぼっています。私はその様子を見ていて、子供の頃を思い出し、よもぎを摘んできて、石との間にはさんでつぶしてみました。「おばさんが小さい時ね、この草でせんべいを作って遊んだだよ。すっごく臭いけどね。」と、話してやりました。

「お寿司を作ろうよ。」

娘たちは、もうカチカチと始めています。

チューリップの葉を切って、開かないように松葉でとめています。手巻きよもぎ寿司の出来上がりです。久しぶりのままごと風景でした。

この子たちが親になったら、また、きつとよもぎ寿司を作って子供たちと遊んでやるのでしょうか。そう思うと、何か胸が熱くなるのでした。



6年 落合 直子

## 二、子育ての絵本作り

上地五丁目 小須田正子

「お母さん、今年も絵本の展示あるの？」

春が来るときまって誰からともなく、こういう言葉が出てくる。

「うん、あるよ。銀行でね。それから夏休みには図書館でもね。」

毎年、手作り絵本の展示をしているので、子供たちも楽しみにしているようです。

「そのうさぎの絵、いいんじゃない。いくつかかいて綴（と）じてみたら？」

「うん、やるやるー」

こうして一冊の絵本ができて上がり。

子供たちは、ちよっときつかけを作ってやるだけで、いとも簡単に感動を絵に仕上げていく。親でなければ冗談にもほめられない絵の中にも、本人にとっては真剣な部分があって、説明を聞いて「なるほど。」と感心してしまったりする。

「お母さん、お母さん、今日ね、マットで後ろ回りができたよ。布団のうえで見せて

あげるね。来て、来て、早く、早く。」

「おっー頑張れーやったあ。」

うん、今年はこれでいこう。これをタネにして話のすじを作ろう。丸い形の絵本なんかどうかなあ。でも、ちよっと安易かな。

私の作る絵本は、いつも子供たちが主人公です。冒険をしたり、おかしなことを言ったりすると、これが材料になります。絵を見た子供たちが言います。



手作りの絵本

「あっ、これ、わたし。」

「これ、お姉ちゃん。」

「えっ？お母さん、似てなあい。」

「いっの、いっの。」

本当に身近な題材で、誰もがアルバムに写真をはるのと同じ気持ちで、今の感動を残すことができたかと思っただけで始めた手作り絵。いつのまにか十年目になりました。

育児のあいまにちよこっただけと、近所の方のおさそいで絵本づくりの会につれて行ってもらったとき、零才だった長女はもう四年生。五才で初めて折紙の絵本を作ったから、今年が初挑戦の童話を作りたいとはりきっています。姉の見よう見まねで、次女は三才から七冊近く作りました。

近所の同年代の仲間しかなかった私にも、孫のためにと作品を作っている若いおばあちゃんや、自分の目が悪いからと、盲学校へ、点字の手でさわる本を寄贈されている方々等、とても興味深いことの連続でした。

その絵本の会のメンバーも、だんだん若返り、今では私が一番の古株となってしまいました。子供の成長とともに絵本を読んで聞かせることさえも、本当に少なくなりました。十年前に縦書きー右開き、横書きー左開きの初歩さえも知らずそれでも意気込みはあふれるほどあったのに。あの胸いっぱい思いで参加したのが、つい昨日のよう。

「お帰り。何かおもしろいことあった？」

ついつい、子どもの回りを好奇心いっぱいに見てしまう自分にあきれてしまいます。これは、知らず知らずのうちに絵本の題材を探しているからでしょうか。

「あんまり忘れ物ばかりすると、本に書きちゃうからね。」

と、冗談半分で言っただけです。こんな叱り方では、効き目がいまいちなのが残念です。いつまで続けることができるのか分かりませんが、発表する場がある限り、世界にただ一つしかない本を作り続けて行きたいと思えます。

## 三、実践報告会に参加して

上地五百目 丸林 恭子

「実践報告会」、わが子が上地小にお世話になっている間に「この次」という機会はないかも知れないと思い、今回は最後の記念講演、御指導まで出席させて頂きました。広い運動場の駐車場は満車となり、道路にまであふれていました。

公開授業は私たちの小学生時代には考えられないような独創的なものが多く、「ミニコンサートを開こう」、「お楽しみ会を成功させよう」、「もっと男女が仲良くなる会を開こう」など、主要科目以外の学級会や体育、道徳までにもわたる広範囲のものでした。

図工の時間にしても、昔はただ絵を描いて提出し、上手な絵だけが後ろの掲示板に貼られるだけでした。グループ毎に皆の絵を掲げ、お互いに鑑賞しあうこともまた図工の授業であり、そんな中からもクラスの輪が育まれていくのだと思いました。小学校においては知識もさることながら、最終的には仲間の団結、助け合い、クラスの輪へと広がってほしいと考えるものすから。

また、「上地よもぎもちを作ろう」、「上地の空襲」、「上地焼に挑戦しよう」といった郷土への愛着を深めさせるような内容にも、単に知識の詰め込みだけでなく、地域と一体化していこうという学校の姿勢がうかがわれました。

実践発表会でも会場の体育館は出席者でいっぱいの盛会でした。先生方が一年前から「学習指導部」、「児童理解部」、「学級経営部」の三部会にわかれ、研究、実践されていたことを初めて知りました。そういえば、昨年の学級だよりの内容にもいろいろ思い当ることがあります。

「地域に目を向けた指導」、「一人ひとりの児童への理解を深める指導」、「自由で生き生きとした学級づくり」の発表も、主題の設定、研究方法、実践記録、結果、考察と凝縮された内容にも敬服いたしました。発表内容に対する質問なども次々に手が挙がり、時間が足りないほどでした。その質問にも即座的確な解答がされる我が上地小の先生方も頼もしく、私までも胸を張る思いでした。真剣な雰囲気、一言ひとことに聞き入りました。ただ、一般父兄にも資料の配布があれば、さらによく理解できたのではないかと思います。

その夜遅く帰宅した主人の傍で、どっぷり主婦の私には強い印象の実践報告会の内容を興奮気味に、また、なぜか自慢げに話し続けたものです。

今回出席されなかった方々には、次の機会には是非出席されるようお勧めします。

今後とも、上地っ子の健やかな成長を心より祈念しております。



## 四、アメリカ生活の思い出

若松東 生田 芳子

思いがけず主人の海外勤務が決まり、アメリカ・ミシガン州・デトロイトの近くに住むことになりました。

当時、四才、六才、八才の三人の子供たちは、すぐに現地校に編入したのですが、A・B・Cも知らず先生やクラスメートの言うことは、さっぱり分かりませんでした。

でも、世界中の人々の子供たちが集まり、転入生の多いアメリカの学校では、英語の話せない子がいても、驚くことはありませんでした。子供たちはすぐに友達ができ、身振り手振りで、ときどき日本語を交えながら、遊びの中で英語を覚えていきました。

そして、学校では、週一回、先生やボランティアのお母さんが、一対一で英語を教えてくださいました。この個人指導は、英語だけでなく、算数や他の教科でも行なわれ、個人指導を受けている子には、落ちこぼれというような暗いイメージは無く、コンピュータなども利用して、楽しんでやっていました。

一年が過ぎると相手の言っていることが大体分かり、二年たつと、自分で言いたいことが英語で話せるようになり、学校の授業にも付いていけるようになりました。

最初の頃は、思うように話せず、ストレスがたまり、学校へ行きたがらない日もありましたが、休んだことはありませんでした。

「どうしてずる休みしなかったのかな。」

と、子供たちに聞いてみると、

「先生が優しく、学校が楽しかったから。」

と仰いました。できる子はやればよいし、きらいな子は無理してやらなくてもいい、という教育方針のせいでしょうか。校長先生をはじめ、どの先生もとても優しく熱心で、少しでも進歩があれば、本人が驚くくらいに誉めてくれるのです。そして、よい子には授業中でもキャンデーのご褒美がもらえます。

楽しい行事もたくさんありました。バースデーパーティーはもちろん、ハロウインの仮装パーティー、バレンタインパーティーなど、毎月のようにクラスでパーティーがあり、クラスマザーのお母さんがケーキやクッキーを用意して先生のお手伝いをします。六月の学年末には、ピクニックといって、校庭でのバーベキューに親子で参加し、先生に一年間の感謝をします。

幼稚園の時に、特に印象に残っていることが一つあります。それは、「ショーアンドテル」といって、子供たちが自慢話をみんなの前でするのです。

たいていは、プレゼントされたおもちゃとか洋服、本などの自分の好きな物を家から持ってきて、クラスメートに見せながら少しお話をすることですが、小さい時から人前で自己主張ができるようになり、すばらしいと思いました。

そして、自己主張というと、昨年のアメリカ大統領選挙の頃でしたが、学校で、選挙権を持たない子供たちが二人の候補者のどちらを支持するか討論をして、プラカードまで作り応援するのです。当然、先生が政治の話を分かり易く



(学校でのピクニック)

説明してからのことですが、小さい時から政治に関心を持たせることはとてもよいことだと思いました。

アメリカの学校の夏休みは、六月中旬から八十日以上もあります。宿題はありません。一か月以上の家族旅行をしたり、サマースクールに入って、好きな勉強やスポーツをします。夏休みでない時にも長期の家族旅行をすることが多く、そのために学校に欠席届を出すと、先生は、「それはいいですね。たくさん楽しんでいらっしやい。」と言います。『明るく、のんびり、のびのび、と過ごす子供たち』だからあんなに大きくなれるのかな、と感心していました。

四年間の駐在員生活を終え、帰国してからはや半年が過ぎました。帰国前に、日本人として常識的な感覚に欠けるところがあるから、学校に馴染めるだろうか、心配していましたが、子供たちは、すっかり上地っ子の顔になりました。

転入生に対して、学校中で温かく迎える上地小に、アメリカ的な雰囲気をとでも強く感じました。

上地小の皆さんが、勉強に運動に一生懸命頑張っているのに、アメリカの子供たちと同じように、とても生き生きと、明るい、いい顔をしているのに驚き、とてもうれしく思いました。

## 五、心なごむ草花への水かけ

上地五丁目 尾上 綾子

七月二十一日から八月三十一日までの夏休み四十二日間、毎日欠かさず、環境整備部員が、校内の南花壇や「親子さし木の会」で挿した挿し木などへかん水を行ないました。

今年は、校舎増築のため、柵があつて、水まきのホースが使いにくく、朝夕のかん水は額に汗した大変な作業でした。私の当番のときは、二人の子供と一緒に went ました。子供たちは、喜んで長いホースを引っ張って水をまいていました。最初は水遊びの感覚ではしゃいでいました。でも、途中で、

「お母さん、いっぱい挿し木があるね。」  
と、弟が言うど、

「こんなに、たくさんきれいな花が咲いているなんて、知らなかった。」  
と、兄が言いました。

そして、水をかけ、鮮やかさを増した、サルビアの赤、マリーゴールドの黄色に、母子三人すっかり見とれていました。花を、じっくりと見る余裕のない忙しすぎる子供たちが、何だか可哀想な気がします。校内お花見の会というのがあったらいいのにも思いました。

これらの美しい花々、挿し木の会の挿し木が少しずつ大きくなっているのも、佐野先生をはじめ諸先生方、日ごろのご努力のおかげと思います。苗床作り、土壌の改良、花壇への定植などは本当に大変なことと思います。これからは、皆で上地小の緑を守っていききたいと思ひます。



(サッカーチーム)

家庭の場合も同じで、庭の草花も、一日でも水やりを怠ると、葉は元気がなくなり、しょんぼりしてしまいます。水をかけてやれば、それに応えるかのように、緑は生き生きとしてきます。草花は、言葉を話しませんが、手をかけてやれば、素直に応え、私たちの目を楽しませてくれます。思いやりの心が大切であることを草花から教えられます。子供たちにも、学校や子供会の花壇の水かけを通して、草花に対する思いやりの心が自然に育ち、道端に咲いている名前も知らない花を踏みつけることもない優しい心をもった人になってほしいと思います。

私たちの上地学区には、大谷公園、南公園など緑に恵まれた環境がたくさんあり、いつでも自然と触れ合うことができます。これらのすばらしい環境を大切にしていきたいと思えます。

夏休みの水かけを体験した私たちは、学校の花壇の美しさ、緑の多さを改めて知ることができました。朝日に輝く草花の緑に、つかの間の心なごむひとときを持つことができました。

最後に、学校の緑を保つために、ほんの少しですがお手伝いできたことをうれしく思っております。



2年 尾上 佳宏

## 六、詩「わすれもの」

上地六丁目 塚本 秀子

誕生日が来るたびに  
何かわすれものをして  
いるよう  
うしろを振り返るくせ  
いつから？

時間の波に流されて、  
目の前のものしか見えなくて  
忘れかけてた大切なもの。

ふと足をとめた時、  
足もとの可愛い花  
何げない石ころ  
そして見あげた空の青さが  
私の心にしみこんでくる。

心をしずかにすませれば、  
みえてくる。  
忘れてはいけけない わすれもの。

※ この作品は、中日新聞  
家庭欄「私の詩」で、佳  
作に選ばれた作品です。



## 七、いい笑顔

上地六丁目 小島 圭子

わが子が子供会にお世話になっている以上は、一度はやってくる子供会の世話係。今、子供会にとっぴりと首までつかっている毎日です。この時期は、前半が終わり、Uターンの時です。

振り返ってみると、前半の一番の山場は何と言っても、球技大会です。六月の始めの頃の、第一回目の練習日。子供達の表情は、「ただ呼ばれたから来た。」「おばさん達はどんなことをしてくれるんだろ。」「そして、「暑いのにヤダナァ。早く帰りたい。」「と、言っている。

「とりあえず体操してー」と私たちは言う。一回では素直に聞かない。

「では、ラジオ体操ぐらいやろうか。」「と言うと

「去年は、そうじゃなかった。」「と素直じゃない。

最初の頃、この「去年はそうじゃない。」「という言葉にどれほど悩まされたことか。私たち大人は、毎年変わってしまう。そして子供達は、子供会のプロなのです。一年生に入った時からずっと、おばさん達を見ている。そんな子供達の中にどうやって入り込んだらよいか、それが私たちにとつての大きな課題でした。ある人は、「〇〇しなさい。」「〇〇はだめ。」「の命令言葉を使わないように努力し、ある人は、子供と同じようにわざと乱暴な言葉を使って、子供と友達になっていききました。子供よりもルールを知らなかった私たちは、何度も失敗したり、ドジをしながらも、「子供達に教えてもらい、一緒にやっていこう。」「という態度を見せると、「おばさん、おばさんー」と言いながら、近寄ってきてくれるようになりました。そして私たちも、「子供って可愛いね。おばさん、と言ってきてくれると、何でも聞いてあげたくなるほど可愛い。」「と、それぞれが語り合うまでになりました。

そして、回が進むごとに、子供達とコミュニケーションがとれ、いよいよポジションを決めるときです。私たちは、スポーツがどんなに苦手な子でも、六年生は全員レギュラー入りして欲しい、とそれぞれにポジションを与えましたが、苦手な子にとっては大変だったと思います。スポーツ好きな子なら絶対知っているような常識も教えていきます。その時、ルールをよく知っている子は、「そんなことも知らんの?」という態度をあらかじめ見せ、そして、注意を受けた子は、その態度と、私たちの注意で、余計に上がってしまい、その注意も理解することができないのです。それで泣かせてしまって、あわててとりなし、励ます、といった一こまもありました。

でも、そんないろんなでき事を乗り越えて、七月の終わりの頃には、皆、なかなかいい顔で練習に出てきてくれるようになりました。この頃、練習試合を組んだとき、まあまあ成績で勝ちました。その時です。子供達の顔。

「おばさん、勝ってたよー」

「うれしいー」

いい顔。いい笑顔。「ようし、頑張るぞ。」「子供達ともども、私たちもやる気満々でした。

そして試合当日。練習の成果は全く発揮できず、子供達はカチカチになってしまったのです。対戦相手の前評判にのまれてしまったのです。試合が終わると、子供達は私達から目をそらしたのです。勝ち気な子、内気な子、皆、泣いていたのです。

「あーあ、終わったなあ……。」「と思いました。」「この二か月間の毎日の練習の結果がこれか……。」「とぼう然としました。でも子供達の涙が、今まで真剣にやって来たからこそその、悔し涙なんだと思ったとき、その純粋さがうれしく、涙が止まりませんでした。

いろんな子がいます。でも私たちが心にかかっている子は、感情や思いを言葉に出して言っていない、目立たない、静かな子なのです。球技大会が終わった今、そんな内気な子たちも、道で出会うと目で気持ちを表わします。私たちが気付くまで、いっと見つめ、声をかけると、とてもいい笑顔で答えてくれるのです。

## 八、現代っ子の病気は

若松東 渋谷 千枝子

「登校拒否」「校内暴力」「自殺」小学生以下の小さい子供さんをお持ちの父兄の方には、あまりピンとこない言葉かも知れませんが、学年が進むにつれ、他人ごとでは済まされなくなっている問題です。

去る十一月十一日、本校の大原校医さんのご講話をお聞きする機会がありました。

『このごろの子ども、心とからだの健康について』という題で始められました。

病といっても、やはり内因性のもの、外因性のもの、からだの病と精神面での病とあるようです。小児ぜんそく、アトピー性皮膚炎、一般的にアレルギーによるものと考えられていますが、運動やアスピリン系の薬が原因でぜんそくがひどくなったりすることもあるようで、時間をかけて何が原因かを調べ、それを取り除くことが必要だそうです。

また、先生は「うちでは、よほどひどくならない限り、あまり薬（注射・吸入方法）に頼らず、日常の生活で、埃、かび、ダニなど発生しないよう、風通しを良くし、掃除を多くするよう指導しています。」とのこと。アトピー性皮膚炎のことも「患部を清潔にし、かかないようにする。乾燥性なので油（ワセリン、セラチナミン軟膏）などをつけ、あまりひどい場合は、ステロイドホルモンを使用するが、副作用があるので注意してほしい。」など、患者の立場に立った答えで、薬害とか大病院のベルトコンベア式内診だと耳にする一方で、こんな良心的な病院もあるのだなと思いました。

他にも、尿の話（蛋白尿と血尿、同時に出た場合は腎臓病を疑ってみる）とか、全く他人ごとではない肥満の話、冒頭で書きましたが、登校拒否、うつ病の話、参考にしたい話ばかりでした。太りすぎにしても、子供のときに増えた細胞は減らないし、成人してから高血圧、心臓病など余病が出やすくなるから注意するように、秋の夜長といっても夜食、間食、果物などは控えたほうが良さそうです。

ぜんそく・アトピー性皮膚炎は年令とともに軽くなったり、減っているのに対して、うつ病は多くなっているとの話。ここでも、複雑な社会に対しての歪みが子供の世界にまで及んでいるのが分かります。最後に、どの病にしても、ゆっくり時間をかけ、原因をつきとめ、焦らず対処すること、普段から主治医を決め、人間関係を作り上げておくことも大切だと締めくくられ、ご講話を終えられました。

秋も深まりゆく一日、充実した時を過ごすことができ、四十分という時間もあつという間に過ぎてしまいました。翌日の文化展の日にも、鈴木先生のお話をお聞きし、母親とはどうあるべきか、考えさせられる二日間でした。「子供は親の背中を見て育つ」などとも言われます。からだも心も健康で、あつたか〜いおふくろさんになれたらと思っております。



（渋谷 千枝子）

## 九、上地の十年前

上地五丁目 中野 志信

早いもので、長女が一才の時、西尾から引越してきてもう十年を迎えます。大きな建物もなく、目標といえば上地自動車学校と医療刑務所でしょうか。一本の舗装とはいえ、「おそがい」ような道を抜けての、美合までの道のり。

今は大谷公園と呼ばれていますが、十年前も前となりますと、池の回りには大人の背丈ほどのアシが生い茂り、その水辺に、ワラビ採りに行ったことも幾度かあります。そこにはキジの番い（つがい）やカラスなどが生息しており、鳴き声をよく聞いたものでした。あのカラスの大群は、いずこへ行ったやら。

そして、ある日、突然その山の崩れ、一日、一週間、一か月と日が過ぎていくとともに、山が平地になっていきました。今の市民ホームの土手が、あの山の、唯一の名残でしょうか。

今は、キジ、カラスの音が、子供の歓声に変わり、学校の児童もあと少して一千人とか。

生活道路も、一本また一本という感じです。康生までのバス路線など考えてもいませんでした。

## 十、年の瀬に思う

若松東 平沢 鈴江

「お母さん、ぬいぐるみの足、洗ってやらんとかわいそうじゃん。」と友恵が。

「あつ、本当だね。すすがついとるね。」

「すすって、何い?。」

と広大が。

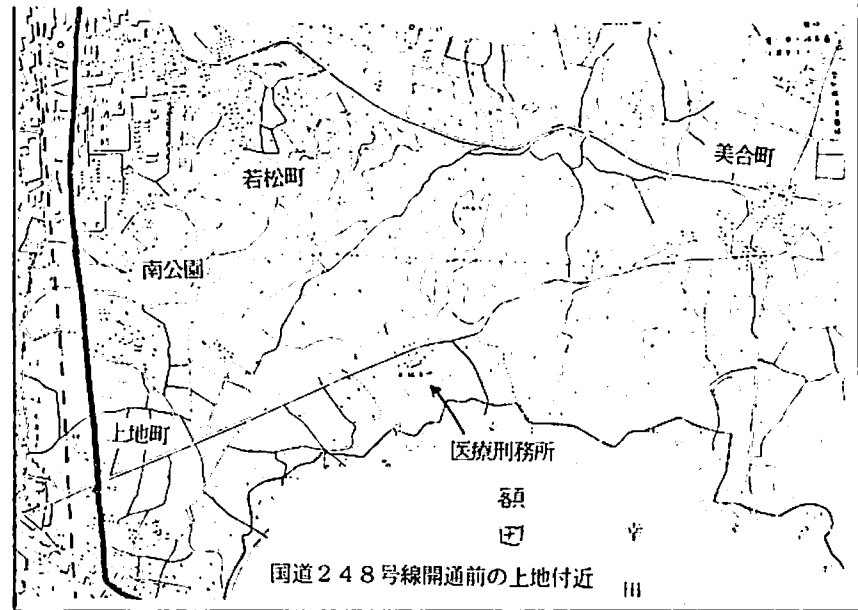
「うーん、あのね。トトロのまっ黒々助。」

「えっ、うっそうー。」

と目にしたこともない「すす」と、トトロのまっ黒々助に会える期待でワクワクの子供たち。

そこで、「むかしはねえー。」と少女時代を思い出し、なつかしい冬の木造校舎の話に変わります。

十二月に入った今ごろは、石炭をくべて暖をとるだるまストーブの登場です。お弁当持ちの日は、交代で上下を入れ替え、お弁当を積み上げます。ストーブ当番が、たきつけ用のまきを家から持ってきて、自分たちで火をくべるのです。石炭を入れるタイミングがあり、みんな真剣に火をおこすのです。日曜日になると、村の子供たち（通学団）はみんな歩いて一時間ほどの杉林へ、まき拾いにでかけます。大きな背負子（しよいこ）をかつぐ子、わら縄で編んだ特製の背負子の子、ふろしきには母の作ってくれた生ミノをぬったおにぎりアメ玉が入っています。学校で使うストーブ用と家のお風呂用のまきですが、姉も弟もみんないっしょです。晴れの日でも、杉林の中は陽の光りを閉ざし、薄暗く、気味が悪い。こわさを隠すため、また



山の中で迷わないよう、大声で歌いながらのまき拾いです。

今ごろの教室は、陽だまりの窓がわの席と、だるまストーブの近くの席が、一週間おきに回ってくるのがとても楽しみでした。

二学期の終業式を控え、年末の大掃除です。

頭の部分だけ笹を残したシノ竹を三、四本束ね、すす払いをします。せいっぱい背伸びをし、天井をざらざらとシノ竹が走り回ります。くすんだ天井がすっきりします。仕上げはぬか雑巾で床をごしごしと。今のワックスがけの代わりかな？

また、年の瀬の家々の大仕事、どこの家も障子の張り替えです。この時は、元気のいい子供たちの出番。兄弟が並んで「せーのうー」のかけ声とともにバシッ、バシッと両手で大きな穴を障子に空けます。次は、ピリッ、ピリッと誰が一番早く障子戸を丸坊主にするか競争し、田んぼに水を引くための小川につけに行きます。わら縄のたわしできれいに洗い流し、父にバトンタッチです。

「いいか、障子は、必ず下から上へと貼りあげるんだぞ。」

と言いながら、細い棧(さん)に巾広の刷毛でチョン、チョンと糊付けをしていきます。この糊は、母がお鍋で小麦粉を煮て作ってくれた、特製の障子張り用。父は障子紙をくるくると曲げずにピタッと貼りつけます。

最後は、霧吹きでシュッと、シュッと仕上げ、真っ白に変身した障子戸を見て、父の器用さに目を丸くしておりました。

山村にはクリスマスはありません。「もう、いくつ寝るとお正月・・・」と歌のようにお正月が来るのが待ち遠しいものでした。上から下まで新しい服が着れるし、お小遣いも、お年玉で自分のものとしてもらえる喜び、冬休みに入るとほんとうに指折り数えたものです。

大晦日(おおみそか)が近づくと子供たちは、松の葉、笹(ささ)、南天(なんてん)を取りに行き、母は土の中に埋めてある野菜を掘り出し、煮物の準備に大忙しです。

今思うと、土がクレンザーや食器用洗剤の替わりをしていたんだなあ、と。スポンジの替わりにわら縄を丸めたものなど、今になって、母のしていたことをしみじみと思ひ出します。無言のままに父や母が、私たち子供五人にいろんなことを教えてくれたんだなあ、と気づきました。

今、自分が母となって、自分の子供たちに何を伝え、教えてやれるか考えても、あまりにも楽をしすぎています。洗濯板を使って洗濯をしません。新聞紙をぬらしてから、ちぎって部屋にばらまき、掃き掃除をするなどはしません。火をくべ、おかまでご飯炊きもしません。炭火をおこし、しちりん(岡崎では「ひちりん」)で煮炊きをするともありません。何もかもスイッチひとつで短時間で済ませてしまいます。毎日の生活の中で、母から娘へ伝えることがなく、改めて母の偉大さに頭が下がります。考えあぐんだ末、今年の大掃除は、子供たちにぬか雑巾をプレゼントしようかと、話を持ち掛けました。

「ぬか雑巾ちゃあ、何いー、お母さん。」

「米ぬかを布袋に詰め、雑巾の替わりにするんだよ。米ぬかは、粳(もみ)を取った米(玄米)を白米にするときにできる粉のこと、竹の子をゆでるときに使ったり、おばあちゃんちのぬか漬のキュウリやナス食べたでしょ。あれ、あれのこと。」

そこで、もう一押し。

「今年の大掃除、ぬか雑巾で床みがいてくれる？」

「うん、いいよ。」  
と気持ちのよい返事。

子供たちは、初めて体験することに目をきらきら輝かせています。

「もう、やだあ。」と言われないように、使いごちのよいぬか雑巾作りがんばろうと思います。

できれば上地小でシノ竹のすす払いを体験できれば・・・と、あつかましい思いを抱いております。

## 十一、青少年団体と父兄

上地 二丁目 青木喜久夫



※ 上地地区でボーイスカウト活動をしてみえる青木さんに、スカウト活動に対する思いを書いて頂きました。

今年は、冬とはいっても暖かい日が続いています。油断をして、風邪など引かないようお互いに注意しましょう。

私は、ボーイスカウト活動を行っている一員として、最近感じたことをお伝えしたいと思います。皆さんのお子さんは、いったいだれが責任を持つのでしょうか？学校？父兄？地域社会の人々？・・・テレビのみ見ているだけで、友達といっしょになって外で遊ばない。自分の好きなことが分からない。なぜなのかな？

私は、今の子供たちには、いろいろなグループ団体に入ってそれぞれの活動をしてほしい、と思っている一人です。その活動を未永く続けて欲しいのです。活動していく中には、楽しいことはかりではなく、苦しいことや辛いこともあるはずですが、それを乗り越えて続けてほしいのです。

続けて活動するためには、どんなことが必要でしょうか。本人の努力、周囲の人々の協力、楽しいプログラムなど、その他多くの要素があります。忘れてならないのは、子供たちは、父兄と関係指導者たちをだまって見ていることだと思います。あなたは、子供の心が見えますか？外見上の姿や形は見ることも多いと思いますが、今悩んでいること、今欲しいこと、今楽しいことを本気になって考えることが、一日のうちで何分あるでしょうか。

「今、忙しいから後でねー」

「そんなことは自分でやれー」

子供は、今がわからないから尋ねているのに「ちょっとでいいんです。ちょっとの積み重ねは大きいと思います。塵も積れば山となりたいてい、のです。」

お隣さんと顔を見合わせたときに、どんな行動をとるのでしょうか。「コンニチハ」または「オハヨウ コザイマス」と言っていますか。皆さんがですよ。顔を合わせないようにフレックス・タイムをしていますか？子供さんがそういうことも黙ってみていると思います。お隣さんと笑顔であいさつ、気の合う人と笑顔であいさつ。大人がしていると、子供さんもしたがると思います。言い過ぎたでしょうか。お母さんが、子供たちに「オハヨウ」と言うと、言わないわけにはいなくなる、と思います。

悩み、質問、苦言を言える環境は、大人と子供の両方が努力しなければ出来ないと 생각합니다。

子供は大人を経験していませんが、大人は子供時代があつて、今の大人時代があると 생각합니다。私にも子供の時代がありました。その頃の苦しさ、楽しみ、悩みを通りすぎてきたのです。思い起こしてほしいですね。その経験をふまえて、現在の子供の苦しみ、悩みを余裕を持って考えたいと思います。自分の子供を信頼するから、用事を頼み、自分の親や先生を信用、信頼するからこそ質問してくるのだと思います。その両方の信頼を得るために、明日も今日以上に努力したいと思います。

皆様のご指導をお願いします。

※ スカウト活動（岡崎第三団）についてのお問い合わせは、青木貴久夫さんまで

上地 二丁目 十一番地 四 ☎ 五四一 二八八五 または (オカリョウ内) 五 一 二五 二五

## 十二、「あいうえお」を実践しましょう

上地学区総代会会長 成瀬 司

初東風といえ、寒月が赤光と降り注ぐ夜道を、愛犬を追いながら健脚を競ううち、時として小雪がちらつく中で無意識のうちジャンパーの襟を立てた。かつて小生が幼い頃は、この上地地域にもかなりの積雪があり、県道（現在の旧二四八号線）で竹ぞりにて滑った記憶が脳裏をかすめた。現在では車社会のため、このような光景は想像するのも許し難い現状になりました。

この反面、上地土地画整理事業により、新生上地学区の誕生をみたのであります。このような回想の中で、学区発展のため、「あいうえお」を実践しようと、一九九〇年代の台言葉にしたい。

明るく住み良い学区づくりに「あいうえお」  
愛する郷土のために  
意欲を持って  
う り れ い の ない 地域 づくり  
え 笑顔で頑張りましょう  
お 岡崎市発展のため、上地学区のため

## 十三、PTA活動を通して

上地六丁目 成瀬多喜子

今から六年前、長女が四年生の時、担任の先生からの電話一本で、何も分からないまま学級委員を引き受けてしまいました。それから今日まで、学級委員、PTA役員を合わせて六年間もやってきました。

その長女も、今年は中二で、受験の真っ最中です。

他人からは、長い間よくやったと言われる前に、本当に物好きだからやれたんだ、と後ろ指をさされる思いがしますが、優柔不断な性格なため、どうしてもつっぱねることが出来ず、今日に至っています。

このように申しますと、いやな事ばかりのように思われますが、そればかりではありません。

野田前校長先生、土岐元教頭先生、嶋田校長先生、松原教頭先生、その他大勢の諸先生方との出会いを通して、教えていただき、学ばせていただきました。

その中でも、亡くなられた柴田前教頭先生とは、九か月間のお付き合いだけでしたけれど、今でも、目を閉じればあの温和なお顔が浮かんでまいります。

そして、忘れてはならない人達、一緒にPTA活動を行ってきた先輩、同輩、学級委員の皆様のおかげで、今までやって来れました。

役員をやっていますと、学校の中だけでなく、学区の皆様たちとお話する機会も多く、人生の勉強もさせていただきました。また、岡崎市のPTA役員懇談会などにも出席し、改めて、上地小の活気ある活動に胸を張って帰ってくることも度々あり、優越感にひたることもできました。

もし、私が一人の父兄でしたら、わが子だけでしか目に入らなかったらうけど、役員をやったお蔭で、上地小の児童として、一人一人を見ることができました。

その例として、バレー部の全国大会のための募金活動、応援があります。選手たちの熱気に疲れも忘れ、自分の子供が選手でもないのに、二日続けて、バスに揺られて、東京に行ってまいりました。

今思えば、走馬灯のように苦しかったこと、辛かったこと、楽しかったこと、行事が成功してホット胸をなで下ろしたことが脳裏をよぎります。

特に今年は、六年間の中で一番行事が多く、印象に残る年だと思っています。

研究発表会をはじめ、校舎の増築、学芸会の接待、いろいろありますが、遊具設置の目的をもって実施した日用品バザーで最高の売り上げを達成出来たことが、私個人として「ヤッター」という気持ちです。

このように、いい思い出をたくさん作ってくれた周囲の皆様には感謝するとともに、長い間、目をつぶってくれた家族に、心から手を合わせたいと思います。

そして、長男が小学校を卒業すると同時に、私のPTA活動も卒業です。

長い間やらせていただきありがとうございました。お世話になりました。



おわりに

ここに「続々・ふるさと上地」の発刊をみることになりました。「ふるさとシリーズ」の取材にご協力いただいた各位と、「寄稿」を寄せていただいたPTA会員の皆さんに厚くお礼申し上げます。

私たちは、この冊子を作るにあたり

- 一、足で調べたり書いたりしたものであること
  - 二、生き生きと活動する上地っ子の生の姿を伝えること
  - 三、できるだけ子どもにも参加してもらい、手づくりであること
- などを考えて進めてきました。

しかし、微力なため、調査不足や誤りもあろうかと思っています。その節は遠慮なく指摘していただければ幸いです。また、学区に埋もれている地理、歴史、民俗、言い伝えなどがありましたら、お知らせいただきたいと思っています。

この冊子によって、わがふるさと上地の良さを再認識していただき、すばらしい学区づくりのため、少しでもお役に立てば、編集にあたった者としてこれ以上の喜びはありません。

なお、表紙の題字は本校の高橋由美子教諭によるものです。

平成二年三月

研 究 同 人

嶋田 稔	松原 暁三	大井 正之	佐野 佳三
長坂 信一	清水 宏	川尻美智子	金子 喜子
守山 妙子	青木 純	中根美恵子	鈴木 尚子
小林 明子	太田 恭子	土屋 恵子	岡本きみゑ
高橋由美子	満本 妙子	渡辺 修	松本 博子
酒井 幾子	奥村 武文	松野加代子	稲垣たかみ
名倉 嘉章	森下 初子	杉本 峰	鶴田 秀幸
河合 友子	田中 鉄也	竹平 真仁	富田 尚子
中嶋ゆかり	加藤 勝彦	岩瀬 幹夫	永坂 治子

続々・ふるさと上地

発行日 平成2年3月20日

発行者 岡崎市立上地小学校

校長 嶋田 稔

岡崎市上地三丁目31番地

電話 (0564) 53-0501

印刷所 プラザー印刷株式会社



